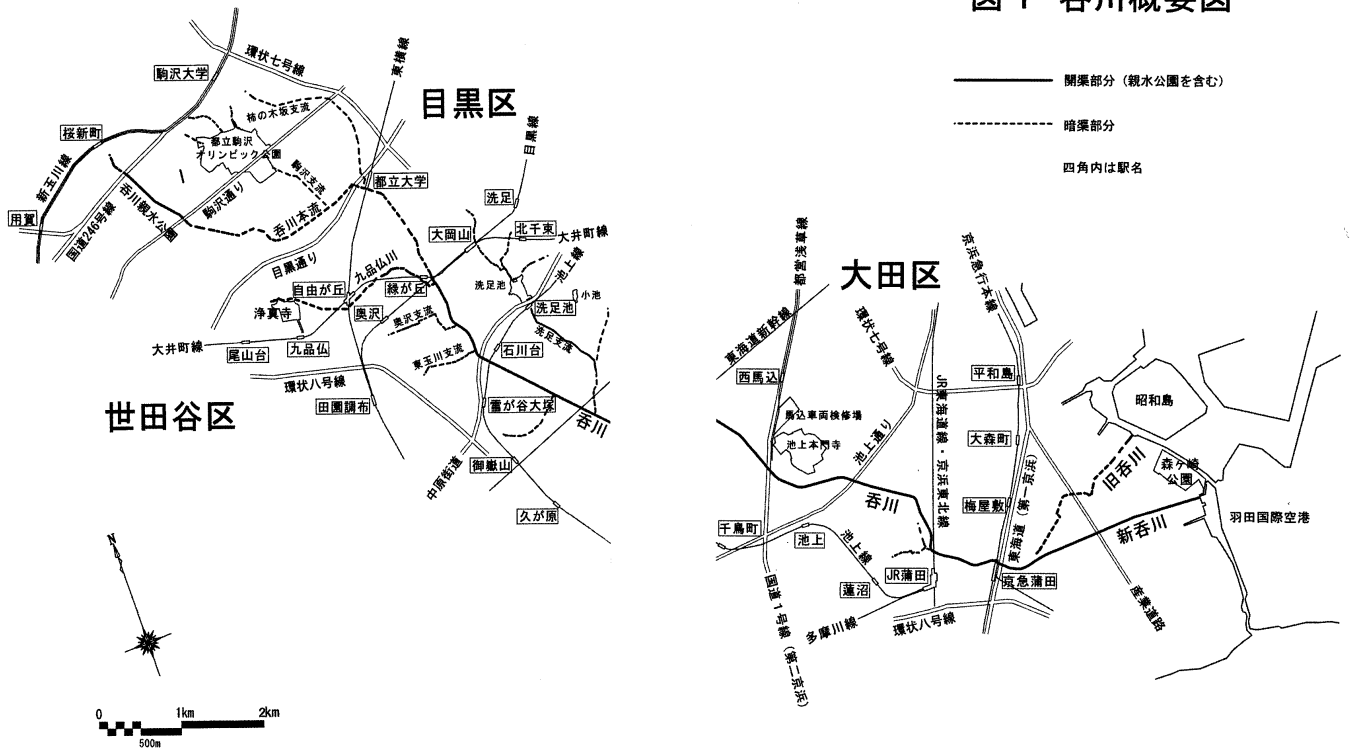


呑川の支流、暗渠、歴史と自分の生い立ちを織り込みながら、呑川を描いている。読み物として、面白い手法だと思う。文献からの引用もあるので、調査期間や執筆期間は相当長いと思われる。

図1 呑川概要図



さて、呑川の現在、歴史、地理について、その概要をおさえてみたものの、この程度のことは数時間もあれば、要領に良い高校生にでも調べることができよう。前述した「呑川の会」のHPには、発足以来二十年以上にわたり、詳細なレポートや図解が蓄積されている。そんなエンサイクロペディアがありながら、私はなお、呑川について、何を書こうというのか。いや、何がしかのものが書けるとして、それは私のあまりに個人的な「呑川にまつわる思い出」になってしまうのではないか。その「思い出」も当然ながら、小林秀雄のいう「故郷」を成立させるべき「つもりつもった強い思い出」である筈もない。むしろ白濁した曖昧な記憶や、思い出す価値もない些末事ばかりで、本当にそんなことがあったのかも、今となっては覚束ない。にもかかわらず、それら遠い日々の何気ない日常、しかし不思議と鮮やかな光景を、どのような理由によってか私は、ここ最近、ますます思い浮かべるようになった。

商店街から祖父母の家の方に少し北上したあたりに、「いすず」と呼ばれる広大な空き地があった。漫画「ドラエモン」に出てくる土管が転がっているような原っぱで、古い住宅地図を見ると「(株) いすゞ自動車」と記載されているが、社有地として閉鎖されていたのではなく、子供たちが自由勝手に入出入りし、銀ダマ鉄砲を撃ちあったり、正月になるといっせいに凧を揚げた。まだ幼い

私たちにとって、とんでもなく広いフロンティアであった。週に何日か夕方になると、オート三輪が乗り入れて、臨時の八百屋を開店する。群がる主婦に向かって店主のオヤジは、「ホラホラ、未亡人が先だよ！」と声をあげた。戦争未亡人という意味であったろうが、私は「母も未亡人なのに……」と思ったりもした。鶏卵は一個ずつ、もみ殻に埋まって売られていた。

さて、三十三歳で夫を亡くした母は、再婚したいと考えていて、久が原時代から何度も見合いをしたが、うまくいかなかった。ある日、知り合いの紹介で先方の自宅を訪ねると、見合い相手の男は見ていたテレビを消すこともなく、紹介者の話を片耳で聴きながら、母の顔をまともに見ることもなかったという。そんな話を、母は姉と私とに話して聞かせた。「あなたたち子供がいるから、再婚は難しいのよ」と言われたこともある。きびしく、また優しい母であったが、そういう弱さも持ち合わせていた。奥沢に越してきてからは、見合い話も少しずつ消えていったように思う。

ともかくも奥沢中学を卒業した私は、私立大学に付属した高校に通うようになった。通学に一時間以上もかかるので、毎朝七時前に、奥沢駅から電車に乗る。そのためか朝夕の通学の折りに、奥沢中学の同級生に会うことはなかった。

彼ら同級生のほとんどには、大学受験という宿命があったが、その必要性のない私は夜になると、呑川にそってどこまでも散歩した。島畑橋から下流に向かって歩き、中原街道を越えてまっすぐ久ヶ原方面を目指す。新幹線の近くまで来るとやっと満足して、呑川から離れ、東調布公園で草野球のナイターなど観戦し、また来た道に戻る。そんなことを、週に何回も繰り返すのが日課であった。小学校三年の二学期を最後に、世田谷区に引っ越した私には、大田区へのノスタルジーのようなものがあつたのかもしれない。奥沢に越してからも、N君のアパートや、その前にある団地の庭、洗足池など、大田区側で遊ぶことが多かった。もっとも高校生時代の呑川散歩では、ただの一度も新幹線を越えて道々橋や、松仙小学校を見に行くことはなかった。十代も後半にさしかかった私は、過去ではなく、未来のことで頭がいっぱいであった。ノスタルジーはあつても、過去はあくまでも過去でしかない。ただこれから自分はどのように生きていくのかと考えるとき、散歩の足は何故か、呑川下流へと向かった。

現代東京の散策者としてすぐれた著作のある富田均は、呑川と同じように暗渠化された二級河川、目黒区・品川区を流れる立会川の緑道公園について、「手術したあとの縫合の風景」(『私を愛した東京』、以下同じ)、あるいは「石の橋柱だけがさながら石碑のようにのこっている」と慨嘆する。

等々力の家で私は大学を卒業し、就職もした。そして結婚して等々力を離れ、前後して姉も独身のまま一人暮らしを始めた。等々力の家には、母が一人残された。子育てが終われば自由を満喫できるという親もいるが、母はそうならなかった。まずは頼るべき夫がいない。朝起きても、一日を過ごしても、夜眠るときも、等々力の家で一人きりであった。再婚の夢はどうに潰えて、これから先の長い人生を、一人きりで生きなければならない。そのような孤独や不安が襲ってきて、別居している私や姉、親戚中に電話して「寂しい」「死にたい」と訴えるようになった。私が家にいよう

と会社にいようと、時間を選ばなかった。私が大学を卒業してはじめて働いた会社には、まだ直通電話がなく交換台から呼び出された。母が何度も電話してくるので、交換手の女性が苛立つような声になった。最後には出勤前の早朝に電話してきて、「今、手首を切った」などと言う。嘘だとわかっていながらも、会社を休んで駆けつけるしかなかった。結局は入院させて、専門家の手に委ねることになる。父の死後しばらく入院していたのも、同じ類の病院ではなかったか。しかし入院先でもいろいろと問題が生じ、けれど**正式な病名は明示されない**。「これは病気ではなく、ただのわがままというか、性格の問題です」と、体よく追い出されてしまう。それでまた別の病院を捜し、問題を起こしては追い出される。最終的には、私が結婚して住んでいるアパートの別に部屋に住まわせることになる。アパートは新宿区にあり、父が生前に相続したもので、ながらく鉄骨造の古アパートであったが、私の結婚を期にすこしは見栄えのする鉄筋コンクリート造に建て直した。銀行からの借入資金なので、母が一室を占めることで家賃収入が減り、事業収支が苦しくなると会計士に言われたが、親戚からの強い要望もあって、そのように落ち着いた。もっともその後も母は、「わがまま」を繰り返し、入退院を繰り返した。**私の実人生とでも言うべき三十数年の間、母が完全に癒えることはなかった。**

空き家となった等々力の家は、借家となり、使い古され、最後には廃屋のようになっていく。それでもアーチのついた赤い玄関扉は、色越せながらもそのままであった。等々力の家は間違いなく、母の人生の「丘の上」に建っていたのである。

双流橋の先で呑川は右へ急カーブするが、左岸側道よりまっすぐに離れていく道があり、これもまた北蒲田方面へと供給された用水跡らしい。ゆるやかに蛇行し、ほどなく JR の線路にぶつかるが、常緑の街路樹を配し、無表情な呑川と比較すると、そこだけ陽差しを受けているように明るく見えた。

右カーブの途中、太平橋手前の水面に、白い船型の装置が稼働している。右岸の西蒲田太平橋児童公園の「香川線道」案内板に、「**スカム発生抑制装置**（屋形船型浄化装置）」の説明がある。汚水を含んだ雨水がこのあたりで滞り、水底に堆積した汚泥から発生するガスの異臭を抑制するため、水中に酸素を供給するらしい。「汚水」「汚泥」とは謳わず、「スカム」という耳慣れないヨコ文字を用いるあたりは、お役所的でなく、しかしお役所的なのであろう。説明書きにはさらに続きがあるが、白いテープで隠されている。わずかな透けを読み取ると、「大田区では平成十一年度に西蒲田地区に二基設置し、平成二十六年には、老朽化していた一基について、機能強化を含めた新型装置への更新を行っています」とあった。つまり現状は三基稼働となるが、太平橋手前の一基の他、それらしきものはなかった。浄化がすすんで二基が不要になり、もとの一基に戻ったのか。あるいは最新の一基以外は、効果がうすいと判断されたのか。

「蒲田」という地名について、
蒲草(がまくさ)の生えた地、
蒲草は菖蒲の古名

ごみ回収フェンスを仮設した菖蒲橋、中之橋と下ると、ビルやマンションの狭間に、京浜急行電鉄本線の二階建て高架線（図 53）が見えてくる。ほぼ地上を走る JR 線路とは異なり、高速道路と見まがう威容を誇る。蒲田駅ホーム部分は、車窓から周辺の風景が見えないように、あるいは周辺から車内を覗かれないように、パンタグラフの高さを除いて外壁パネルに覆われていた。JR 蒲田駅より早く、明治三十五年開設の京急蒲田駅であるが、利用者以外にはほぼ無縁で、ややローカル色が強かった。羽田空港へと分岐する空港線もあるが、浜松町からモノレールが走り、国際空港の座が成田に移ってからは、時代から取り残されたよ

うに思えた。しかし最近になって多くの国際路線が羽田に戻り、海外からの観光客が増加するにおよんで、突如、グローバルシティ東京の重要インフラ拠点となった。成田国際空港と乗換なしに、京浜急行・都営浅草線・京成電鉄とつなぐ「エアポート快速」も誕生し、大型のキャリー・バックをひく外国人旅行客も目立つ。呑川にそって高架線に近づくと、上下ホームの案内放送が重なって反響し、駅ではなく、国際空港のロビーにいるような錯覚にとらわれる。駅の外壁パネルは目隠しでなく、防音対策かもしれない。

高架下の側道は整備中で、東海道側へ抜けられない。最近になって架替えられたらしい弾正橋からのぞむと、用水を失って呑川のみを渡る夫婦橋（図 54）が見える。いや、「婦」がいなくなった「夫橋」と言うべきか。これと云って特徴のない、即物的な橋であった。高架にそって京急蒲田駅方面に迂回すると、JR 蒲田駅に向き合う西口は再開発され、高層マンションの下に商業集積もあるが、日曜日の昼近く、行き交う人影も少ない。ひっそりとして寂しく、九台分あるタクシープールも空っぽであった。改札階へとエスカレーターで上らず、地上レベルを東へと抜ける。東海道の拡幅予定があるのか、工事の仮囲いがめぐり、なんとなく落ち着かない。新呑川右岸には夫婦橋親水公園が整備され、旧夫婦橋の親柱が二つ、説明書きもなく据えられていた。

あとがき

呑川を主題に一冊の本を書こうと思ったのは、もう五、六年も前のことであるが、とりあえず『呑川のすべて』というタイトルを決めただけで、その後は別に書くものを優先させた。ようやく下調べする段になって、「呑川の会」の存在を知り、「すべて」はおこがましいと思いつつも、同会の探索範囲外、つまりは呑川の周辺部なり私の個人的な記憶なりを材料に書き始めることにした。もちろん同会の豊富な研究・調査資料は、あり余る手助けとなった。遅まきながら、この場を借りて感謝したい。